第三百十九話　新妻や婚約者を同乗させて共に特攻す！

９月２３日世田谷山観音寺（世田谷区下馬に鎮座）にて執り行われた「特攻平和観音年次法要」に参列した。散華された陸海軍の特攻隊員（６４１８柱）を祀った特攻観音の、年に一度の「慰霊法要」である。隣接する駒繋神社から宮司を迎えて神仏習合の法要だ。

１　神州不滅特別攻撃隊

観音寺境内に「神州不滅特別攻撃隊」の碑があり、碑文には『第二次世界大戦も昭和二十年八月十五日祖国日本の敗戦と云う結果で終末を遂げたのであるが終戦后の八月十九日午后二時当時満洲派遣第一六六七五部隊に所属した今田均少尉以下十名の青年将校が　国敗れて山河なし生きてかひなき生命なら死して護国の鬼たらむ　と又大切な武器である飛行機をソ連軍に引渡すのを潔しとせず谷藤少尉の如きは結婚間もない新妻を後に乗せて前回二宮准尉の偵察した赤峰附近に進駐し来るソ連戦車群に向けて大虎山飛行場を発進前記戦車群に体当り全員自爆を遂げたものでその　自己犠牲の精神こそ崇高にして永遠なるものなり　此處に此の壮挙を顕彰する爲記念碑を建立し英霊の御魂よ永久に安かれと祈るものなり

（以下個人名省略中尉９名少尉１名の氏名が出身地と共に刻されていた。）昭和四十二年五月　神州不滅特別攻撃隊顕彰会建之』とあった。

２　経緯概要（『妻と飛んだ特攻兵』（角川文庫）、NET 情報から）

関東軍第 5 練習飛行隊（大虎山飛行場　満州錦州省）は、8 月 15 日に関東軍司令部より戦闘停止命令を受領していたが、ソ連軍による葛根廟事件などの虐殺事件（メモランダム１１１話、２６４話等参照）を知り、「このまま降伏すれば葛根廟の悲劇がここでも繰りかえされる」、「戦いもせずにおめおめとソ連軍に降伏できるか」との思いで結束し、ソ連軍に一撃を加え居留民の避難する時間を稼ぐことした。

然しながら、練習機ではソ連軍の重戦車相手では体当たり攻撃しか通用しない為、戦車に対する特攻を計画した。計画の中心者であった二ノ宮清が賛同者を募ったところ士官である少尉ばかり 10 名が賛同し（二ノ宮を含め 11 名）、自らを「神州不滅特別攻撃隊」と名付けた。

その中の谷藤徹夫少尉（青森県出身、「特操、高文捨てて学鷲へ」といわれた。）は妻女朝子を、大倉巌少尉は婚約者スミ子を同乗させての出撃を要望した。勿論、一般女性を作戦機に搭乗させるのは軍規違反であったが、二ノ宮等は敢えて同乗を許している。谷藤少尉夫人は同乗を哀願したという。

特攻出撃当日の 8 月 19 日に、二人の女性は白いワンピース姿で日傘をさして飛行場に現れ、それを見送りと勘違いした基地の兵士が日傘をさしていることを咎めると、朝子は涼しい顔で「女性ですから、日焼けはしたくないんです。」と冷静に切り返したとされる。神州不滅特別攻撃隊は故障で墜落した 1 機を除き、2 人の女性を乗せた 10 機でソ連軍の戦車部隊に向かった。然し、特攻が成功したかは不明だという。この攻撃は戦闘停止命令違反の戦闘行動、且つ女性２名を同乗させたとの軍紀違反でもあり、特攻扱いにはならず、また戦死扱いにもならなかったが、谷藤少尉の両親ら関係者の尽力により、1957 年に神州不滅特別攻撃隊の全員が厚生省より戦死認定された。

1967 年に神州不滅特別攻撃隊の碑が建立された事をきっかけにして朝子の名誉回復の運動も行われ、1970 年には朝子も死因はソ連軍戦車によるものとする死亡告知書が青森県庁に認定され、夫婦ともに戦後 25 年を経てようやく名誉回復された。

＊知られざる至高至純の同胞愛、究極の夫婦愛の発露であり、涙を禁じ得ない。

（了）